

二十八 第二次世界大戦と太平洋文化時代

戦争がますます厳しさを加え、私の家の上でも空中戦が演じられ、近所の高射砲の炸裂音は家を震動させ、宿病のリョウマチもこうじてきたので、私はとうとう山梨県の山村へ疎開を決心した。それは昭和二十年の三月であった。

疎開先にあつては、私は専ら東洋史の研究に没頭していたのであるが、軍閥当局の目はこの山村までも私を追ってきた。村の駐在が時々御機嫌伺いと称してやってくるのであつた。しかし私は、この第二次世界大戦がどんな影響を東洋文化の今後に与え、どんな位置を文化史上に占めているか、そのことが終始念頭から離れなかつたのである。

以下に掲げるのは、疎開先から東京に戻つて『東洋文化史百講』の第四巻として執筆した第九十九講、第百講の中の数節である。

三 理想の消滅

第二次世界大戦が前の大戦と異なる精神的相違点は、第二次大戦に現われた戦争目的に理想主義が姿を消したことである。前の世界大戦に際して最も輝やかしい色彩を放つた理想は、広い意味の社会主義者の非軍国主義、非戦主義であつた。歴大な軍備を持った独逸側に対して、到底勝目が無からうと見られた英、仏が、兎も角もその戦に耐えて、漸く世界的応援を招致し、遂に最後の勝利にまで遭ぎつけることができたのは、戦争勃発当時における社会主義者の非戦運動のおかげであつたと言ひ得るであらう。然るに第二次世界大戦に於てはそれがなかつた。従来諸国の政権外に立つて非戦主義、社会主義の理想のために戦つてきた、社会党、労働党の理想的活動は既にその姿を消し、更に同じくマルクス主義から転生した、イタリーのムッソリーニ一派とロシアのレーニン一派とは、ともに保守的独裁主義を展開して、新たに帝国主義的進撃を外方に差向けるに至つた。イギリスの労働党首領マクドナルドはムッソリーニを称賛し、ドイツのヒットラーは自ら国民社会党を組織して、これまたムッソリーニと同盟を結ぶに至つた。各国の政党と政策とは、いまいになり、国際関係は複雑怪奇になつた。日・独・伊三国は防共協定を締結しながら、ドイツも日本もロシアに対して別個に不侵略条約または中立条約を締結し、その不戦条約を結んだドイツが突如としてロシアに戦争をしかけ、ロシアはまた無条件降伏を提議した日本に迫りかけて宣戦するという有様になつた。国際正義も社会理想も人道も解放も、悉くこれ愚かしき政治家どもの詐欺瞞着のための囂語となつた。こうしてこの大戦はその醜態陋作を終局し得ずに今なお紛糾を重ねている。(二九五〇

年十月九日記

四 日本の冒険

この第二次世界大戦に於て、最も広大な地域に亘って進撃を展開したのは日本であった。中国全土を殆ど席捲し、仏領インド支那を制圧し、シャム政府と結び、ビルマに独立政府を樹立せしめ、英国大艦隊を撃滅して、マレイ半島を瞬く間に占領し、パースバル將軍とその大軍を捕虜にしてシンガポールに凱歌を挙げ、他方に於てはフィリピンに敵前上陸を敢行し、モルッカ、ボルネオの諸大島を飛び越えて、ジャワに強行軍を上陸せしめ、西はスマトラ、東はニューギニアと、恰も無人の境を行くが如く、戦えば勝ち、攻むれば取る、という有様であった。広大無辺な中国大陸及びインド支那諸国は別として、西南太平洋に於て日本軍が占領せる主たる諸島の広さは実に二百四十万五千三百三十八平方キロメートルに達し、日本の殆んど七倍の面積に相当するのである。更に海と陸との全占領地域を合算すれば少くとも東半球の三分の一を含むのである。これがために日本は少くとも一千万人の動員を必要としたであろうし、後方生産部門の人員までを加えたならば八千万の日本国民が殆んど総がかりであったと言わねばならぬであろう。

昭和二十四年四月、日本政府の発表せる統計によると、無体財産、在外資産の損害、喪失を含まない、日本の被害総額は実に約四兆二千億円（昭和二十三年末の公定価による）の巨額に達し、国富の四分の一を喪失したことになる。そしてそれは昭和十一年以降に蓄積された我国の資産は全部失

われた勘定だと言える。次に建物の被害は二百三十六万戸（爆撃、艦砲射撃等による）、国民の死者総数百八十五万人、この外にソヴェト・ロシア及び中国に抑留中の犠牲者は幾十万に達するか、今知るよしもない有様である。

およそ以上の如き無謀な大賭博を敢行したことは、狂気の沙汰と言えば、それまでであるが、わが、一小島国の貧弱な民族が、これだけの活劇を成し得たことは、また驚異に価することでもある。それには戦争指導者の意識よりは寧ろ日本の民衆と、太平洋諸地方の民衆との心裡に長く育まれて来た「アジア人のアジア」「インドネシア人のインドネシア」という思想が大いに与って力あるものであったと思う。愚かな軍閥の野心的指導の下にも、これだけの大進撃が、たとえ一少時の間にもせよ、遂行せられたということは、歴史上決して軽々に看過すべからざるものであると思う。殊に終戦に際して、数千里の外地に散布せる一千万の軍兵を殆んど一糸乱れず帰国せしめた終局策の完遂に至っては、世界古今の戦争史にかつてその例を存せざるところであって、これは憐むべき敗戦民族のために与えられた尊き慰めであったと言えるであろう。或いはこれを以て誤れる天皇信仰の結果であると罵るものがあるかも知れないが、しかし、それにしても、こうした民族的訓練は一朝一夕にはできないものである。こうした訓練が、若し人道のために、人類解放のために行われたならば、それは実に美しい人生の芸術として天下後世に幸福と光明とを齎らすに至るであろう。不幸にして、日本は悪指導者のために国際正義に反する侵略者としての汚名を冠らされ、親近であるべき中国国民を侵害し、到る処に憎惡の種を蒔いて、民族永遠の汚辱を蒙るに至った。

五 変態的革命

第二次世界大戦が太平洋沿岸に与えた影響は広大無辺であって、今日まだ之を明確に捕捉することはできない。朝鮮の独立、ジャワ其他のインドネシア共和国の成立、フィリッピン及びインドの独立、中国共産政府の成立、日本の委任統治領たりし太平洋諸島の米国帰属、沖縄列島の米国管理等、は未だ完全に決定されたものとは言えないまでも、ほぼ予見し得るところである。台湾の運命、南樺太及び千島の帰属如何等は、今日は尚未定である。しかし、こうした細い事項は文化史の上からは差程重大な事ではない。重大な点は、中国の国土とその住民とが、今後如何なる耕作を受け、如何なる社会生活を展開せしめられるかにあり、インドの地と人とは、如何なる開発と知恵とを授けられるか、等の諸事項にある。顧みればこの大戦は東洋諸民族にとっては大革命であった。今もなおその革命は進行しつつある。ただこの革命は外来の大きな力によって動かされている。そしてその力は二つの基点から発せられ——ソヴェト・ロシアとアメリカ合衆国——は互いに対立して、闘争を続けている。そのため、東洋諸民族の自発的の力はまだ完全に動いてはいないが、しかし世界的連帯勢力が漸く支配的になりつつある、現代の歴史過程に於ては、先ず世界的規準に則ってこそ、民族的創造が可能になるのであらう。それにしても長い年月の間には、東洋諸地方の地的及び史的環境の影響力が、それぞれの社会の文化の上ににじみ出るものである。同じく共産主義でもロシアと中国とは自ら異なった形態が現われるであらう。同じく民主主義でも英国と米国との間

には随分多くの相違点が存在する。

この大戦の結果として、日本も他力的の革命を遂行した。憲法を改正して人民主権の大義を確立し、軍備を撤廃し、戦争を抛棄することを憲法に規定し、農地改革を徹底して、土地所有権を合理的に平分し、大資本の独占権を矯正すべく大財閥の分解を強行する等、それは予期せられなかった社会革命であった。この革命が果してどこまで守られ、何時までこの線に沿うて日本の歴史が進展するかは今後の問題であるが、広島、長崎の原子爆弾によって、戦争の惨禍を具さに味わされた日本民族は、この革命の精神を永久に忘れることが出来ないであらう。

九 新しい諸問題

第二次世界大戦は従来に無かった様々な新現象を国際史上に投じた。原子爆弾の国際管理、戦争犯罪人の裁判法、軍人其他の捕虜取扱法等、幾多の新問題が発生した。広島、長崎に投下された原子爆弾の惨禍は、その被害者である日本に於ては、戦争の結果として半ばは諦められていたようであるが、全世界の国々に於ては大問題になった。終戦の時に戦勝感謝の祈禱を要求せられた英、米のキリスト教会の中には、寧ろこれを人道上の罪惡なりとして、その祈禱を拒否したものが少なくなかった。軍事施設の無い一般民衆の住居を無差別爆撃するさえ人道問題として、やかましかったのであるから、一発の爆弾を以て数十万の無辜の民を一瞬の間に殺戮する爆弾が西洋文化社会に非難された事情は吾々に於いても想像がつく。

戦争犯罪人の裁判及び処刑と軍人其他の敵国人捕虜の長期拘留とは、これまた今度の大戦の結果として現われた新しい事実である。野蛮時代には敵の降伏者は殺すも生かすも勝者の自由であったが、近代に至っては降伏者を死刑に処する例はなくなった。然るに今度の第二次大戦の結果はこの新しい処置が国際裁判の名に於てドラマチックに行われた。若しこうした裁判が仮りに現在の対立両陣営の戦争の結果として行われるとしたら、それはまた容易ならぬ影響を歴史上に遺すであろう。日本と妥協した南京政府の陳公博、褚民誼等を死刑に処した蔣介石は今や中共政府に追われて台湾に在り、若し逮捕されれば、矢張り戦争犯罪者として処刑を免れ得ないであろう。若しまた中共政府が敗北する時があるとしたら、その時の毛沢東一派の運命や知るべきである。勝者は常に正義、敗者は常に悪人、ということなれば、遂に「力」は正義なりという結論に到達するであろう。かくて歴史は遂に人間の進歩を否定することになるであろう。捕虜無送還の事実に至っては寧ろ人類が野蛮に逆もどりしつあることを示すものである。しかし人間の歴史は、これで終るものではない。今後に於ける歴史の転回は、之を久しきに亘って観察せねばならない。スターリンは愚者か、賢者か、悪奸か、これは歴史家の批評を待たずとも、後世自ら赤裸々にされるであろう。

太平洋文化時代

二 太平洋時代

更にまた東洋と西洋との関係が最近俄かに連帶的に密結して来たことは、右の如く西洋と東洋とを対立して考え得ない部面を益々増大しつある。現在は世界が所謂独裁共産国家群と所謂自由民主国家群とに二分されているが、一たび均衡が破れた場合、世界の形勢が如何に展開すべきかは容易に予断し得ないものがある。そして、それが如何なる成行に至るにもせよ何れの民族も孤立の存在を続けることは不可能になってきた。しかし世界の歴史が如何に進展するにもせよ、各民族がその地理的並びに歴史的環境によって、比較的の優劣勝敗と榮枯盛衰とを運命づけられるであろうことも、また否定し得ないであろう。

前講に引用したセオドル・ルーズヴェルトの「地中海の隆盛時代はローマ帝国の衰亡と共に終りを告げた。大西洋文化の時代は目下その絶頂にあるが、これまた遠からず、その資源は枯渇するであろう。しかして之に代るものは実に太平洋時代である」という見方は先ず常識的の結論だと言えるであろう。そして「この時代は、前記三時代の中で最盛を極めるであろう」との見方も一理ありと言えるであろう。この意味に於て、東洋文化史は、これから本舞台に入るのだとも言えるであろう。言葉を代えて言えば、世界の中心的舞台としての太平洋の文化史は、まさに今後に展開されるであろう。ことにアジア大陸に沿うた太平洋岸には、将来予想もつかぬほどの偉大な文化活動が展開されるであろう。

蒙古の西方、タルバガタイの峻嶺から吹きおろす黄塵万丈の嵐が、東亜諸民族の文化にどれほどの感化を与えたか、毎年夏から秋にかけて太平洋の沖合に起る熱帯的低気圧が颱風となって吹き寄

せる時、われわれ沿岸諸民族の生活に如何に大きな利害を及ぼしたか、南太平洋から北上する黒潮が、更に北方カムチャッカ沿海から南流する寒潮が、如何にわれわれの海洋生活に深刻な影響を及ぼしたか、およそこれ等の事実は、東亜の諸民族が常に遭遇した自然現象であって、この中に育まれた諸民族の文化に自ら傾向を一にするものの存する所以である。太平洋と東亜大陸とは、一つの氣流が空を蔽い、一筋の浪が海を支配している。チベットの高地から流出する黄河や揚子江の濁流は太平洋の潮水をも黄濁する。東洋諸民族は一味にならねばならぬ宿命を持つと言えるであろう。この宿命を自覚し、この宿命に沿うて、自らを組織し、他と融合する民族こそ、まさに起らんとする太平洋文化の開拓者、担当者たる資格を保有するものである。近き将来に於て、世界文化の中心となるべき地理的並びに歴史的天恵を担うところの太平洋諸民族の使命は、まことに光輝に充てるものである。

三 閥の力の闘争

いま世界は独裁共産主義陣営と自由民主主義陣営とに分れて、対立しているが、文化史上に於て、いずれが正しくいずれが正しからずと、簡単に批評するわけに行かない。それは両者とも、それぞれの環境と伝統とによって、各々存在の理由があるからである。また共産主義国と称しても、現実の状態から見れば、必ずしも理想的の共産が行われているわけでもなく、民主主義と言っても、必ずしも万民自主の生活が実現されているわけではない。共産党という少数の閥が大衆を強制

して、大きな官僚的専制組織を形成するのが今日のソヴェト制度である。他方の民主的自由国家は、それに比すればいささか光明があり、個人発意の活動が許される場面も多いが、しかし、結局は富の力と、宣伝力とによって世論までが支配され、やがてそれが多数決となって大衆を圧することになる。両者が互に対立して争うのは、両者の暗黒分子の間に行われる。換言すれば、幻影と幻影、恐怖と恐怖との間の、相剋に過ぎないのである。真実の共産主義と真実の民主主義との光明は互に相和して美しい万葉の華を展開すべき筈のものであらうと思う。

ところが歴史には常にずれがある。閥の力が人間の進歩にブレーキをかける。幻影が人類をわざとに誘導する。社会主義も共産主義も本来人間解放のために考案されたものであるのに、何時の間にか、主客転倒して、全体のためという名のもとに個人を或る閥または階級の奴隷とするようになった。民主主義も矢張り同じである。平等の自由の個人と、その個人の集団たる国家との間には、如何なる中間的介在者もあつてはならない、というのがフランス革命や、米国独立やの精神であったが、何時の間にか、自由の名を乱用して資本階級或いは閥力が一般大衆を奴隷化するに至った。こうして国際間と閥力間とに絶えず闘争が続けられるのである。

四 日本惨敗の結果

然るに地球を領有する人類の自覚は漸く拡充されて来た。日本人は第二次世界大戦に於て、歴史上未曾有の惨敗を喫したが、そしてこれは日本民族の永遠の滅亡に終りはせぬかと危ぶまれたが、

どうやら左程までに至らずして復活しそうに見えてきた。そのみならずこの大きな失敗はまた、同時に未曾有の大教育と大訓練とを日本民族に施したのである。殊に日本民族が知識的に道德的に啓発された結果は、今後に於て、日本人が自発的生活を営み得るようになった時に漸く現実に現われて来るであろう。若し講和条約が締結せられて、新しい自覚のもとに、世界的意識のもとに、自由の行動が日本人に許されたなら、恐らく従来の島国根性から解脱した寛容な国民性が自ら発揮せられるであろう。世界歴史上に未だかつて見られなかった雄大な太平洋文化の創成者たるにふさわしい民族性を練成さるべく、今回の大敗戦は最も尊い教訓であったと思う。日本の領土がせばめられたことなど、素より問題とするに足らない。第八十講の「テルナーテとチドール」の例など良き模範とすべきである。古代ギリシャの如きも、今日の世界文化の最大の手本であるが、本来小さな都市群に過ぎなかった。

これは今わが日本人だけに就いて言ったことであるが、アジアの諸民族はいずれも同様な試練に会い、いずれも新しい教訓を受けて、世界的意識に於て起ち上るようになったと思う。近き将来に於ける世界文化の中心としての太平洋の諸民族は、これから何を創造し、何を演奏し、何をこの世に与えようとするか。世界は一つの連帯社会となった。地球はわれわれの祖国であり、領土である。今後は排他的に国境を固守又は誇示する民族は地球上の卑小民族と見られるようになるであろう。これからの民族の光栄は創造にある。良きものを創造し、美しきものを演出し、幸福を世に与える。それが民族の誇りとなるであろう。廣大無辺な太平洋と東亜大陸とが包蔵する富は殆んど無限である。この無限の富源を開発して、よき創造、よき芸術、よき生活を営むことができたなら、世に貢献するところもまた無限であろう。東亜諸民族の使命や偉大なりというべきである。

五 インタナショナル

以上の如き光栄ある大使命を担う太平洋諸民族のこれからの生活原理は、いずれに求めらるべきか、これは大きな問題である。これまでの世界文化史がわれわれに示唆することは、何であるか。いまは共產主義と民主主義とは対立して、いずれは雌雄を決しなければならない形勢にある。これは人類の最大の不幸であるが、まことに已むを得ないことである。日本民族の如きも、周囲の状況からこの渦中に捲きこまれざるを得ない場合もあるであろう。間違えば東亜民族間に互に血を以てする闘争が展開されるかも知れないのである。しかし、これは予期せざる不幸として避けられる限り避くべきは勿論である。太平洋文化開発の一担当者としての東洋人の社会生活は、如何なる原理の上に立脚すべきであろうか？ この新しい大使命を担うべく、旧い共產主義も民主主義も最早その資格がない。

太平洋の文化は平和の上に立たねばならない。民族だの国家だのから超越した文化でなくてはならない。そうした文化の下にこそ民族も国家も光るのである。では如何なる原理、如何なる目標の上にわれわれの社会生活を立脚すべきか？ われわれの歴史的環境がわれわれを誘引するための原則是如何なるものであろうか？ 十九世紀から今日に至るまで、世界の諸民族を集合せしめたモッ

トオは「インタナショナル」であった。今日から、その歴史の変遷の跡を顧ると、それは一種過渡的のスローガンに過ぎなかった。国際社会党、国際労働協会、国際連盟等々、それ等は或る他の目的を達成する途中の道標に過ぎなかった。時代の要求に応じた方便に過ぎなかった。そして、その理想たる世界諸国民の結合という目標に達することなしに頽廃してしまった。

然るに、こうした事実に醒めた人々の間に、今度の第二次世界大戦を機会に新しい運動が喚起せられた。それは「国際」に一步前進した「世界政府」「世界人民会議」「世界市民運動」等である。従来の「国際」運動は、国家と国民との独立を認めての運動であったが、今度の「世界」運動は、多かれ少なかれ、これを否定又は制限しての、または否定又は制限せんとする運動である。恐らくこの運動は、歴史進化の過程に於いて、一時は世界支配的の勢力を醸成するであろう。しかしこの運動もまた「国際」的運動と同じく一時的の使命を果して衰頽するであろう。けだし、世界国家といい、世界政府といい、遂にはまた世界的中央集権の制度を形成するに至り、初発の解放的精神を忘却すべき運命に置かれてあるからである。

六 コスモポリトの使命

では永遠の生命を孕んだ、しかも歴史的使命を体した新精神は、いずこにあるべきか？ 新しい世界的社会の中に、個人を生かし、その集団たる民族や国家を生かして光輝あらしめるところの第一原理はいずこにあるべきか？ それは古代に於て、特殊な先覚者、または所謂聖者のみが、体験

したところの精神であり、今は漸く世界の民衆的精神となりつつあるコスモポリチスム是れである。

昔時ギリシャのソクラテスは「俺はアテネの市民ではなくてコスモスの市民だ」と宣言した。それは彼が、単に小さな都市国家の一員でなくて、世界の全人類の一同胞だ、ということを意味したのである。またギリシャの無政府主義者と言われるディオゲネスは「俺は讚美に価する政府、即ちコスモス（宇宙）の政府しか認めない」といった。こうした精神は近代の第一、第二、第三のインタナショナルに欠けていた。今日の「世界政府」にも、「世界人民会議」にも欠けている。

そもそもコスモスは大きな生命力ある有機的存在であるとも言えるであろう。有力な国民組織の下に生長した人間は、誰でもが多かれ少なかれ祖国愛というものを持っている。しかしながら、このコスモポリトの精神に徹しない愛国心ほど病的な脆弱な感情はないであろう。如何なる強大な国家国民も「コスモスの政府」の支配を受けずには一日も生存し得ないものである。従ってコスモスの善き一員としての国家国民は栄えるが、然らざるものは大成せず、一時栄えても忽然として亡びるのである。最近の日本の歴史はよくこの間の消息を物語っている。この原理を悟り感じ且つ生活するコスモポリトにして始めて真の人類愛と祖国愛とを併有することができるのである。（「コスモポリトの使命」「コスモスの市民」「ディナミック」第四十二号、五十七号「一九三三年、三四年」参照）

最近バりに於いて初めて起された「世界市民」運動の如き、いささか右の如き精神を体しているかに見えるが、未だ精確にその趣旨を知ることができないのが残念に思う。ただその世界市民登録国際本部をバりに置いて各地の同志の自発的応援を求めている、という事実に徴しても、既成の国家や民族や国際運動を超越した大きな精神に動かされていることだけは知ることができる。たとえそれはコスモポリトとしての高邁な精神に動かされたものかどうか、判然しないにしても、時代の要求に敏感な一青年の発願として、歴史的意義の深いことを思わしめるものがある。殊にこの思想は、武備を無くし、戦争を抛棄した日本民族にとって、最も親しみ深かるべき性質のものであると思う。さらにコスモポリトの精神に生きる人間は、世界の如何なる地域に於いても、その生活権を樹立する資格を主張し得るであろう。世界無比の狭隘な地域内に閉じ込められた日本人の進むべき領土は、かくて至るところの人口稀薄の国土に発見せらるべきである。これは人類世界の歴史的運命として何れの国民も否定し、また拒否し得ない自然的必要である。太平洋に於ける諸民族と諸文化とは、こうして広大な地域に亘って交流し、混合し、ここに歴史上にかつて見られなかった偉大且つ絢爛たる新文化が展開せられるであろう。東洋文化史のわれ等に示唆するところは、まことに輝かしい未来の使命が、われわれ東洋諸民族に授けられたということである。

解題

『自叙伝』は理論社から上が昭和三十一年七月、下が同年九月にそれぞれ発行されている。いずれも全書判で、上は二二四ページ、二四〇円、下は二四二ページ、二六〇円である。上には著者の序のほか家永三郎が解説を書いている。もともとこの序は、謝辞を除いて、『自由人の放浪記』（昭和四年、平凡社）の序の結びの部分をもそのまま転用したものである。著者の健康が執筆を許さなかったのものである。下には『哲人カアベンター』（明治四五年、東雲堂）に寄せた徳富蘆花の序文「愚かなる石川君」のほか、著作年表、石川永子の「あとがきにかえて」、鶴見俊輔の解説がついている。

本著作集に収録する際、上「青春の遍歴」、下「自由人の旅」を一巻にまとめた。そのため、序と蘆花の序文は巻頭においた。著作年表、「あとがきにかえて」、解説は省略した。また、著者の獄中スケッチ四点をは

じめ、写真十九点が上、下の本文中に組込まれているが、これも省略した。獄中スケッチは第一巻に収録する予定である。

引用文については、それぞれ出典にあたり、原文に戻した。もともと初出の出典にあたることのできない引用も若干あった。また、引用文とは表記されていないが、事実上引用されているもの場合はそのままとした。ただし、小見出しなど加えたり、直したりした箇所もある。本文中、中国と支那が混用されており、引用文を除き、すべて中国に統一した。また北平は北京に統一した。下の二十七「戦後の運動」の章で、『平民新聞』発刊の言葉が引用されているが、これは近藤憲二の執筆したもので全文削除し、前後の字句を多少訂正した。これらの個所以外に文章上の訂正はほとんどない。

（大沢正道）